

## 日本文化の特色とキリスト教との関係

D・ソールハイム

### 序

日本のキリスト教会は、いまだに社会との接触が不十分で、人々との間の意味深い交流ができていないようである。

「日本の宣教師が日本語の義、罪、神、などの言葉を学んで、それを日本語の文章にあてはめてみる。が、これらの言葉の持つ概念は、日本人の心にはほとんど何の感動も与えないことを知るのである。」<sup>①</sup>「言葉が通じたとしてもその意味は文化的背景のもとに理解されるのである。教会と日本文化との間にもう一つの障害がある。キリスト者になる人がいても、彼は何年たっても、社会にたいした影響を与えることができない。自分たちだけで集団を作っているだけである。キリスト教は、その社会の中心の問題とニードに取り組み、社会の人々が理解できるような形態を取らねばならぬ。いかにして福音が、日本文化の核心にまでかかわれるかが重要な問題である。

文化を理解するためには、文化の核になるもの、すなわち世界観を知って理解に努める必要がある。日本の既成宗教には、二つの対照的な世界観がある。この二つを説明して実際の日本の世界観の特徴を挙げようと思う。

## 一元論的世界観

神道は日本で起った宗教である。自然の力に対する信仰に基づき、人間生活をその支配の下に置く。日本では、自然崇拜は一般的な風習であった。人間を取り巻く不可思議なものすべてを神としてあがめた(山・川・木など)。こ

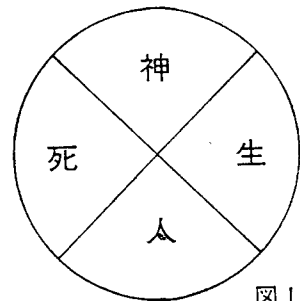


図1

れらは日常の崇拜の対象となり、人間生活と密接にかかわると信じられた。一元論的世界観の特徴は、人間と神の双方を包括する単一の宇宙という点である。これに関連して、特徴的な宗教行為は、倫理的というよりむしろ儀式的である。④このような世界観には、生と死、あるいは神と人とを、明確に区別するものがないことに着目したい。「神は自然現象や人間社会と切り離せない。神を祭り、供え物をして、人々は自然環境と人間社会の慣習を、直接的にも究極的にも、満足を与えるものとして肯定するのである」⑤「われわれはこの世界観と救済の関係を考慮しなければならない。また来るべき世で人間はどうなるか、幸福に暮せるかという、倫理的関心が欠如している点も考え合わせる必要がある。

## 二元論的世界観

仏教の二元論的世界観と、神道の一元論的世界観には際立った違いがある。歴史的宗教は二元論的である。全く異なった世の領域、すなわち、天国、極楽、涅槃などを考えているからである。これらは経験主義的な世界を拒絶す

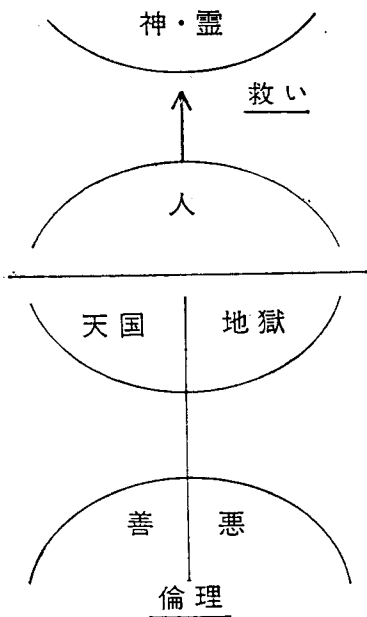


図2

る。「宗教的行為に関しては、歴史上の宗教において初めて、救いの可能性およびその必要性を認めている。この救いとは、経験主義的自己と、この世界の耐え難い劣等性に対する根本的解決である」④

仏教の二元論的世界観は、二つの分離した世界の概念を示している。一方は生きているものの世界、他方は神・霊・死者の世界である。現世の苦しみは浄土の至福とは対照的である。浄土、すなわち無上の幸福の地に至るために様々な手段が用いられる。念仏はその一つである。仏教にはまた、汚れたものから浄土に至るまで色々の段階がある。仏教では、現世の生き方は来世との関連において重要である。これは神道の一元論的世界観と対照的である。現世の倫理的行為が来世を決定する。しかし、ある仏教の宗派においては、倫理的に欠けていても、念仏や信仰が助けになる。

## 現代日本人の世界観

### a 神道と仏教の統合

仏教が日本人の心を確実に把握するまで長い期間を要した。そして神道と統合しつつ発展していった仏教は、日本的色彩の強い仏教であって、色々な点で他の国の仏教とは異なっている。十世紀半ばから、僧侶でないシャーマニ

表1

宗教文化の基本型	人と自然の適応の仕方
神内在論	自然への従属
	自然との調和 (日本文化)
超絶主義	自然を支配

ティックな「民衆仏教」が導入されたのは重要な段階である。これによって平易な仏教の教えや、人受けの良い儀式や呪術が入ってきた。このシャーマニズムは人々にこの世を拒絶するよう促した。

しかし仏教は今や日本文化の中にしっくり組み込まれてはいるものの、日本人の世界観はまだ一元論の方に近い。日本固有の宗教を定義して宗方氏は次のように述べている。「日本の宗教の根本的特徴は、神内在的文化と云うことができよう。」(これは一元論的世界観を意味する。表参照。)

「神内在論の世界は、日本の自然環境や気候のうちに、また農漁村の社会生活における日常経験を通して育っている宗教感情を基本としている。とりわけ、先祖崇拜および自然信仰に特徴がある。これは例えば、超絶的の神として自ら啓示されるキリストとは対照的である。それは神が内在する文化が、自然環境に生きる人間によって創り出された宗教感情に基づいているからである。究極的関心事は、この世に内在すると信じられている神である。」

超絶主義的世界観においては、世界は人間に支配されるものとしてみなされている。信仰は日常生活と切り離される傾向がある。一方、神内在的宗教文化においては、日々の労働や活動に深い宗教的意義がある。

この問題は、日本に來た宣教師にとっては重要な点である。神内在的宗教とキリスト教との出会いには、十分注意が払われねばならぬ。ここでわれわれが直面する問題は、日本のローマ・カトリック信者迫害を扱った有名な小説「沈黙」に鋭く描かれている。

b 家族制度と祖先崇拜

日本では「家族制度」は異なる宗教をつなぐ絆である。これは民間宗教、既成宗教、またいわゆる新興宗教において、中心的要素となる。家族制度はまた、個人と国家をも結びつける。日本人はさかのばれば同じ祖先である一つの大家族として、互いに結びつけられている。

日本社会で役立つ知恵は、家族制度と、目上を尊ぶことに集中している。これはすべての人間関係、学校制度、産業における組織の型などに見られる。使われることばは、話をする人同志の社会的関係によって決定される。

先祖崇拜が行なわれる場所は、家庭、特に大家族においてである。それは大抵の場合、神社と継続的なつながりを持たない、家庭内の事柄である。現在もほとんどの家庭に仏壇があるが、仏壇に対する務めの責任は主に父親が負っている。長男がこの責任を引き継ぐことになるが、男の子がいない場合は、長女が引き継ぐ。長男、あるいは長女がキリスト者になった場合、当然彼らが、先祖礼拝を継続するものと考えられているので、彼らと家族との関係は特別に難しくなる。しかし、一般には、家族全員が、日常あるいは特別な場合に、仏壇を大切にすることになっている。ところで「家族」関係というのは、家庭だけに限定されるものではない。「家族制度」は社会の様々なレベルにおいて見られる。「家族的な型」のうちに人々は互いにかかり合っている。「成功」は、個人的なものではなく、むしろ社会にとって、成功であり助けとなるという見地からとらえられる。そして失敗は多くの人に影響を与えて、目も当てられないこともある。そうなれば、先祖を含めて多くの人に弁明しなければならぬ。

第二に日本特有の「家族単位」として村がある。明治時代になって政府が後援して神社統合計画がすすめられた。村の神社に対する信仰と天皇崇拜とを結びつけて、地方自治を強化しようとした。「すべての村は一つの家族」といった標語を掲げた。人々に神を敬うように促したが、それは地域社会の先祖に限定されたものだった。この時に、自分

たちの先祖は神であり、神としてあがめられるべきだという考えを広めることに成功したのである。一般に考えられることだが、家庭では近い先祖は崇拜するが、古い先祖はあまり大切にしないのではないかとすることがある。が、この時に、ずっと古い先祖で、社会的に特別の貢献をした人を地域社会で礼拝するようになった。

祖先崇拜は国家全体に、そして「一つの家族としての国家」の家長を引き継ぐ天皇家にまで広がっていった。明治時代、天皇を指して天子様と呼んだが、これは後の天皇陛下という呼び名よりはるかに親近感がある。村がさかのぼってみれば共通の慈善家や先祖にゆきつくように、国家全体もまた共通の祖先にゆきつく。かくして人々は一つの大きな家族のごとく感じ、またそのように行動している。これに関連して、二つの神社が特に重要視されている。一つは伊勢神宮で、天皇崇拜と密接に結びついている。もう一つは靖国神社で、戦死した人々に敬意を表す所となっている。戦死あるいは、国家のために死んだと考えられる人々は国家の神とされる。

### c. 現代日本人の世界観とキリスト教

#### 1 人生観、日常生活、究極的関心

日本人は歴史はめぐりめぐって繰り返すと考えている。聖書の意味の永遠について語っても通じない。自然は常に円環的に移り変って行く。生活の中のこの移り変りは、新年、お盆、彼岸などによって祝われる。人間の能力が及ぶことなく常に繰り返し変っていく自然の中で、人の運命が定められる。そして幸福な生活の基準、あるいは鍵となるのは、自然と調和していくこと（表1を参照）、自然と一体となることである。人間の究極的目的と関心は自然と文化のうちにある。人間と宇宙の間には密接な関係がある。自然の美は創造主を示すことなく、自然は自然でしかない。仏教のような宗教は、その最終的結論を超自然、超世界に見出すが、これは日本人の心に受け入れられなかった。

この世界観において人間は、自分や家族の幸福に多少関与し働きかけることもできる。が、やはり彼の運命は見えない力によってほとんど決定されている。日本人は、仏教的悲観主義と、神道的楽観主義の両極間のある地点で生きている。ラインシャワー氏によると、「神道は道德的に罪の意識に欠け、本質的に愉快で明るい宗教である」という。

この世の幸福を獲得するのはやさしいことではないが、神道信者は自由に幸福を追求できるはずである。が、日本人の多くはむしろ悲観的な人生観を持っている。物質的に恵まれ、富、健康、物事がうまく運ぶこと、こういう幸せが究極的関心事であり、すべての尺度でもある。何事も、自分や家族に幸福を与えてくれるかどうかで、決定するのである。宗教行為の多くもこの幸福のためになされている。

もちろんこの考え方は聖書の幸福に関する教えとはかなり違っている。聖書では、貧困、迫害、困難のただ中にも幸福でありうると教えている。日本人は娯楽や快楽を得るために多くの金銭を使うが、この聖書の教えには目をそむけるのである。仏教の快楽を求めるといふ教えは、日本人にあまり大きな影響を及ぼしていない。この背景と対照的に、キリスト教は禁欲的であると思われる。「普通」の楽しみを求めないからである。日本人の目的の一つは、楽しく愉快な生活を送ることである。

さらに来世は現世と大変似たものであって、その必要は、今生きている者が死者を礼拝し供え物をする事で、ある程度満たされる。

#### 2 真理・信仰・神

真理の基準はこの世では人間が見出す。人間には真理を知る能力がある。洞察力とは人を理解しこの世の問題を悟ることである。真理を知るといふことは即ち、この世でおのれ自身の居場所と役割を見出すことである。真理は絶対

的な基準によってではなく、人間によって決定される。人が考え感じるところによって何が正しいかが決定される。人生の基準が並の人間によって決められるわけである。啓示と、文化以前の神の働きによってのみ人に示される聖書の真理とは著しく異なっている。

日本人にとって信仰とは、宗教的な事に熱心であり特定の儀式を守ることである。人の手による精神的活動であり、ある宗教的行為(儀式)のことである。それは必ずしも現存の対象物に関係しているわけではない。守護神や亡くなった先祖に対する感謝もある。新興宗教では、病気の癒しや何かの助けを得るために宗教的行為を必要とする。信仰とは、超自然的神、すなわち全く姿の見えない神を信じることではない。この世界観では、自然のほかに人間も神になることがある。戦争で死んだ人、目立った働きをした人、ずっと以前の先祖も神とみなされた。死んだ人(仏)も神になる。死者の位牌が仏壇から神棚へ移されることもある。

### 3 罪と救い

聖書によれば罪とは、第一に神と神の御旨に逆らうことであり、聖書によって示される「道」から迷い出してしまふことである。日本人もまた正しい道から離れること(迷い)について言うが、それは単に一般に容認されている行為の型からはずれることを意味する。日本人は人(先祖を含む)が何とと思うだろうかと恥を感じることもあっても、神、あるいは行為を導く絶対的真理の前に立とうとはしない。誰かに対して過ちを犯しても「すみません」とわびれば正すことができる。一方、聖書では償いと悔改めを必要としている。日本では罪という言葉は、法的犯罪人に限定され、また道徳的な罪が発覚し、他の人に非難されたような場合に用いられる。こうなると悪い行いをした人は恥をかくのである。しかし聖書的な罪の認識はない。罪という言葉は仏教辞典にも載っていない。日本人は社会的なめ事を起すまいとし、自然と調和して生きようとしている。道徳的汚れはある儀式によって浄められうる。人間は神の

前では失われた罪人であるということとは、日本人に容易に受け入れられることではない。

聖書はまた、永遠の救いと永遠の刑罰、天国と地獄についても述べている。しかしこれも一般の日本人には考えも及ばぬことである。「自分の御先祖様がこの世で犯した罪のために、地獄の責苦にさいなまれているなどということ」は、日本人にとっておおよそありえないことである<sup>⑤</sup>。来世は、現世と似かよった世界なので、幸福についても程度の違いこそあれ、キリスト教の考え方のように極端に違うことはない。

それゆえ聖書の意味の救いは筋違いといったところである。もし救いという言葉が使われるなら、それは人の明確な知覚を妨げるものを取り除く心の働きについて用いられる。はっきりと物事が知覚できれば、人や自然と調和して生きることが出来る。人間は神に似た性質(仏心)を獲得しうる。

このような環境においてキリスト教は、文化や、神の至上のわざよりも人間が何が出来、何をすべきかを強調することによって歪められる危険がある。

### 4 宗教的行為

これまで見てきたように、宗教的行為というものは神と人との関係を中心にするのではなく、行為自体に効力を持つ宗教儀式である。行う者の心や信仰よりも、儀式を行うこと自体や儀式の場所や道具立ての方を問題にする。

日本人は日常生活中の物質的祝福を祈る。個人的な神に対してではなく、八百万やおよその神に祈るのである。柏手を打ち鈴を鳴らせば、神の注意をひくことができる。祈りの対象となる神とは亡くなった祖先、守護神、あるいは自然の力である。祖先に関しては祈りは二つの要素がある。一つは祖先供養で、先祖がああ世で幸せであるようにと、先祖のために祈ること。さらに自分自身が恩恵を受けるように、先祖に対して祈ることである。その祈りは単純なものであって、亡くなった母にこう祈るようなものだ。「お母様、私は入学試験を受けようとしています。どうぞ守って下さい」<sup>⑥</sup>。

日本人は祈りという言葉を実によく使うが、その意味はキリスト教の祈りとは全く違う。だからキリスト教会で祈りの真の意味を教える必要がある。キリスト者は必要とする物すべてを神の前に祈ることができるが、一番の関心事は神の御旨に従って歩むことである。

宗教的行為を他の面から見ると清さ、あるいは神聖さがある。日本人の考えでは、清いという言葉は神とのかかわりにおいてではなく個人的に汚れていないということになる。宗教的清めの行為の目的は、しみや汚れから人間を清めて自然と人が調和した状態に戻すことである。

義は聖書の中心概念である。救いを得るためには、人間は神の前に義でなければならぬ。人は誰でも自分の罪を悔い改め神の義を求めなければならない。日本で義という言葉は人間関係を表すのにすぎない。その根拠は社会的存在としての人間の状態にある。義なる人というのはまず第一に、社会のおかれた場所で忠実な人のことである。キリスト者にもこの社会的状況下で義を求めるのは容易なことである。

寺院や神社が多くあるのにかかわらず、日本人は定期的に参拝することがない。寺院に行くのは祭りの時か、家庭のライフサイクル中の特定の場合だけである。

## 結び

今日本文化は根本的に変わりつつあるのではないかと多くの人が問いかけている。近代化と人道主義的価値観への適応の動きがある。後者は子供に対しすでに小学校の道徳の教科書に導入されている。

若者の多くは満足していない。国家が個人を犠牲にして産業の発展を優先させすぎたというのである。日本の伝統

的な価値観は「愛と誠意」といった、より普遍的な価値観に直面している。国際関係への関心も増している。最近東京で行われた調査で、既成の宗教に対する深い不信感が示された。このような成り行きの中で日本の若者に疑いと不安をもたらした二つの要素は、近代化と人道主義的価値体系である。

われわれはこの傾向を知っていなければならない。しかしまた日本独自の文化的核である信仰心が、いまだに崩壊していないともいえる。日本人は神の内在する世界に生きて、自然と調和しようと努めるのである。一元論的世界観は、仏教の色々な概念と入り混ざり近代化の影響も多少受けているが、それでも広く信奉されている。

これまで日本人の世界観が日本人の宗教的思考、日常生活、宗教的行為に影響を与えていることを考察してきた。キリスト者の使う言葉は、日本人の世界観や宗教的思考に従って解釈される。キリスト教会はこの世界観と真に取り組み努力をして、この文化の中にあつてキリスト教の本当の意味を悟らせ実行させねばならない。見た目に変化しても、またキリスト教文化に順応したとしても、それだけでは何の意味もない。新しく生れ、この世の創造主であり望みである聖なる神を真に知り信じていることが大切である。そうすれば、人がキリストにあつて新しい生活をしていくうちに自と変ってくる。われわれは将来大いに変っていくように祈るのである。文化に取り組みと同様に、教会は文化の中に入ってゆき、人々のニーズにこたえて日本人に仕えなければならない。

注

① Charles Corwin, *Biblical Encounter with Japanese Culture*, (New Life League, Tokyo 1967), p14.

- ② トンケニホトキヲシメテ「Concerned with integrating the human community into the procreativity and harmony of the sacred cosmos.” Allan A. Andrews, “World Rejection and Pure Land Buddhism in Japan,” *Japanese Journal of Religious Studies*, (1977 4/4 Dec) p. 253.
- ③ *Ibid.*, p.251-52.
- ④ Andrews, “World Rejection and Pure Land Buddhism in Japan,” p.253.
- ⑤ Iwao Munakata, “The Ambivalent Effects of Modernization of Traditional Folk Religion of Japan,” vol. 2-3, (JJRS 3/2-3, June-Sept, 1976), p.104.
- ⑥ *Ibid.*, p.107.
- ⑦ *Ibid.*, p.105.
- ⑧ cf. Robert Smith, *Ancestor Worship in Contemporary Japan*, (Calif. Stanford Univ. Press, 1974). John J. Merwin, “Biblical Encounter with Ancestor Veneration in Contemporary Japan,” unpubl. paper, (Fuller, March 1976).
- ⑨ Edwin Reishlawer, *East Asia, The Great Tradition*, (Houghton Mifflin Co., Boston, 1958) p.473.
- ⑩ Smith, *Ancestor Worship in Contemporary Japan*, p.54.
- ⑪ *Ibid.*, p.142.

(姫路東ルーテル教会牧師・神戸ルーテル神学校宣教学講師)  
 多久和 律訳